「宗教改革記念日」　2025 年 10 月 31 日

10 月 31 日は「宗教改革記念日」である。1517 年のこの日、マルティン・ルターはヴッテンベルグの教会の扉に、95 ヶ条の提題を張り出し、討論することを呼びかけた。この提題を基礎にして、カトリック教会に対しプロテスタント（抗議する）教会が誕生していった。それゆえ、この日を記念して「宗教改革記念日」と定められた。

ルターは、①「信仰のみ」、②「聖書のみ」、③「万人祭司」の三原則を主張した。言葉、主張は、時代との交渉の中で生まれてくるもので、当時のカトリック教会のあり方に対し、異議申し立てをしたのである。

①「信仰のみ」は、パウロがガラテヤ書で力説している「信仰義認論」に立つべきだとの主張である。当時、カトリック教会はサンピエトロ大聖堂の改修工事で莫大な費用を捻出させるために「贖宥状（免罪符）」を売り出し、信者に「コインが箱に落ちるたびに魂が天国に昇る」と言って、買わせた。そうすると、金持ちは沢山買い、多くの罪が赦され、貧しい者はあまり買うことができず、罪の赦しに少ししか与れないことになる。ルターは 95 ヶ条の提題の 27 で「箱の中に投げ入れた金がチャリンと鳴るや否や、魂が煉獄から飛び上がると言う人たちは、人間を宣べ伝えているのである」と批判している。宗教は、信仰と善い行いが両輪のように働く時、救いに与ると説きがちであるが、善い行いは金持ちで、恵まれた人には可能であるが、貧しい人たちは善い行いをする余裕がない。パウロは「しかし、人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました（ガラテヤ 2:16)」と書いている。神の救いは、律法を守る・善い行いをするには関係なく、「信仰のみ」によると、ルターは主張したのである。

②「聖書のみ」は、ルターが、信仰は教会の伝統や教えからではなく、聖書からのみ導かれていくのだと主張したことである。当時、カトリック教会は絶大な権威を持ち、信者たちに対し教会の伝統を尊重し、教会が教えることに従順に従うように諭していた。聖書はラテン語で記され、語られ、民衆は聖書を読むことはなかった。祭司たちが教えることをそのまま信じ、従うしかなかった。ルターは民衆が教会の伝統に支配されている状態から、信仰は聖書そのものから学ぶことによって養われると主張した。ルターは聖書をドイツ語に翻訳し、誰でも聖書を読めるようにした。このことの意味は計り知れないほど大きい。民衆は自分の目で聖書を読むことができるようになったのである。

③「万人祭司」は、人は誰でも他の人に対し、神に執り成す「祭司」になれるという主張である。マタイ福音書 16 章に、キリスト告白をしたペトロに対し、主イエスは「私はあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上で結ぶことは、天でも結ばれ、地上で解くことは、天でも解かれる（マタイ 16:19)」と言われた。カトリック教会は、ペトロを初代法王とし、法王に天に結ぶ贖罪の権能を認め、それが、祭司たちにも受け継がれているとした。「告解」において贖罪権を認められた司祭は強大な権力を持っていた。ルターは、祭司だけが持つという贖罪の権能を否定し、全ての人が他の人に対し、執り成しの祈りを捧げることができると主張した。全ての人が祭司であり、人は皆、平等であると説いたのである。

ルターの主張した三つの原則は、時代を刷新する力になった。信者たちは圧倒的な教会の力に抑え込まれていたが、「私は私であって、よい」という自己の確立、アイデンティティを確保する道が開かれたのである。イタリアで起こったルネッサンスは人間解放をもたらしたが、宗教改革が起こした「私の発見」は、中世社会を近代に変えていく歴史的転換点になったのである。